

〔13〕 摩訶迦葉伝---結びに代えて

〔0〕 以上、原始仏教聖典 (A 文献) や後期の原始仏教聖典あるいはアピダルマ文献・仏伝經典 (B 文献) そして大乘の經論あるいは中国撰述の文献 (C 文献: 活字を小さくして記してきた) などから、摩訶迦葉に関するさまざまなエピソードを調査・収集し、整理したうえで検討を加えてきた。その結果をここに「摩訶迦葉伝」としてまとめておきたい。しかし原始仏教聖典の編集たちのイメージを再構築することが第一義で、必ずしも史実を追及することをめざしていないということをお断りしておきたい。

〔1〕 摩訶迦葉は **Kapila** (別名を **Nigrodha** という。いずれもパーリ語) を父として、**Sumanadevi** (パーリ語。中国伝承には「香志」とされる) を母として、マガダ国の王舎城の近くの町の裕福な婆羅門階級の家に生れた。

後に妻となった **Bhaddā Kapilānī** は、父を摩訶迦葉と同じく **Kapila** といい、母を **Sucimati** といった。Madda 国 **Sāgalā** 市在住の婆羅門の家庭に育った。

二人とも宗教心に富んでいたのだから必ずしも結婚を希望しなかったが、両親の懇望に応じて結婚した。摩訶迦葉は 20 歳、バツダーは 16 歳であった。子供ができると、彼らは町の近くの静かな林の中にアーシュラマを作って林住 (梵行) 生活に入った。摩訶迦葉が 30 歳くらいになったころであった。アーシュラマの生活は一応は出家とされるが、しかし完全に家との関係が断絶していたわけではなかった。子供はまだ幼かったが、実際的な養育は里親に任せ、彼らはアーシュラマに住してその成育を見守った。その期間は 12 年間であった。

そしてその後には摩訶迦葉はその頃生れかけていた四住期という生活階梯にしたがって、遊行生活に入った。これは妻と別れての生活である。摩訶迦葉が 42 歳のころのことであった。

ちょうどその頃釈尊も出家されてウルヴェーラーにやって来られた。釈尊と摩訶迦葉はこのころに出会い、肝胆相照らすところがあって、もし阿羅漢になったら互いに師となり弟子となろうと約束しあった。釈尊はこの時 29 歳であったから、摩訶迦葉は 13 歳ほど年長であったことになる。

このような経歴が「もと外道」と呼ばれる原因となったのである。

〔2〕 釈尊は出家をされた 6 年と 10 ヶ月後に菩提樹下で成道された。釈尊はその悟った内容を人に説き示そうかどうかと逡巡されたのち活動を開始された。鹿野苑の初転法輪の後に、ウルヴェーラーに帰って三迦葉とその 1,000 人の弟子を教化され、徐々に弟子が増えていった。弟子たちは諸国に散り、その先々で出家希望者ができるとそれを伴ってウルヴェーラーの近くの町ガヤーに帰ってきて、釈尊から「善来具足戒」を受けて比丘となっていた。そうした諸国布教の生活に弟子たちが疲れ果てたので、そこで釈尊は出先において弟子たち自身が「三歸具足戒」によって自らの弟子を取ることを許されることになった。要するに釈尊は、中央集権的な教団組織を最初のころから目指されていなかったということになる。それはインドの宗教の伝統的なあり方でもあった。これは成道してから 7、8 年が経過したころのことであると考えられる。

これによって釈尊は諸国からやって来る弟子たちをウルヴェーラーないしはガヤーで待つ

という必要がなくなり、そこで弟子たちを引き連れて王舎城に乗り込んだ。その結果、ピンビサーラ王を優婆塞として帰依させることに成功し、有力な外護者を得ることになった。竹林精舎が寄進されたのはこのころである。また王舎城の人たちや舍利弗・目連とその250人の仲間たちを教化して教勢が一気に拡大した。しかしそれに伴って不行跡を行う弟子も出るようになったので、和尚と弟子の制が作られ、やがて具足戒は白四羯磨によって与えられることに定められた。すなわち基本的な出家資格と比丘の生活規定が作られ、これによってサンガが成立したわけである。恐らくこれは釈尊の成道から10数年が経過したころであったと思われる。

[3] 林住期から遊行期に進んで以来、摩訶迦葉は隠遁的・頭陀行的な遊行生活をしていて、釈尊が成道されたことも、マガダを中心に活動されていることも知らなかった。しかしやがて王舎城を中心に釈尊の教団が形成され、活発に活動されていることを知ることとなった。釈尊も摩訶迦葉の消息を知るに及んで、わざわざ王舎城から多子塔のところに赴かれて、久しぶりの再会を果たされた。そして以前の約束にしたがって、摩訶迦葉は「あなたが師、私が弟子」と宣言して弟子となった。この時はたった2人きりの邂逅であって、これを証明する者はいなかった。摩訶迦葉の帰仏の有様など、すべては客観的な描写ではなく「摩訶迦葉の弁明」として、摩訶迦葉の口を通してしか語られないのは、こういう理由があったからである。

この摩訶迦葉の帰仏は、おそらく白四羯磨具足戒法が制定された後のことで、釈尊が成道されてから10数年が経過していたと考えられる。したがって釈尊は50歳前後になっておられたが、摩訶迦葉はすでに60歳を越えていたのではないかと思われる。原始仏教聖典に登場する摩訶迦葉がすでに老齢に達しているのはそのためである。

[4] 摩訶迦葉は釈尊の弟子にはなったが、サンガの生活にはなじまず、以前と同じような頭陀行の生活を続けた。そこで後に摩訶迦葉は頭陀行第一と称されるようになった。

しかし頭陀行は一人で林の中に住み、あるいは一人で遊行する生活であるがゆえに、摩訶迦葉の存在は阿難など釈尊の教化活動の比較的後期に弟子となり、サンガの生活しか知らない比丘たちには知られなかった。そこで釈尊は半座を分けられるなどのパフォーマンスをして、摩訶迦葉が自分と同等の存在であって、決して軽視してはならないことを知らせる必要があった。半座を分けられたというエピソードは漢訳のみにしか伝わらないから、あるいは事実ではなかったかも知れない。しかし何らかの手段によって釈尊は、摩訶迦葉が自分と等しい、自分に次ぐものであることを弟子たちに具体的な形で表されたことがあったものと考えられる。

いわば摩訶迦葉は古いタイプの仏道修行者の代表であり、阿難は新しいタイプの仏弟子の代表者であって、そこでこの間に多少の軋轢が生じることになった。頭陀行そのものがすでにサンガ生活が常態化していた一般の比丘たちには仏教と異質なものに映るようになっていた。四依法さえも具足戒を受ける前に誦されることが禁止されていたのであり、提婆達多が提案した五事が拒否されたのは当然であった。

また頭陀行を墨守するような古いタイプの修行者である摩訶迦葉には、女性を出家させる

ということには承服できないものがあった。そこでその仲介の労をとった阿難には摩訶迦葉はよい感情を持っていなかったし、逆に摩訶迦葉は比丘尼たちからは敬遠される傾向にあった。その傾向の象徴的存在がトゥッラナダー比丘尼であった。

阿難に対する摩訶迦葉の「童子のごとし」という非難や結集の時の詰問など、摩訶迦葉と阿難の間にわだかまりのようなものがあることを推測させるのは、こういう背景があったからである。

[5] このようにして、釈尊の晩年になって摩訶迦葉の存在が教団に知られるようになった。その頃はまだ舎利弗も目連も存命であったが、彼らも摩訶迦葉には一目をおいていた。その彼らが釈尊に先立って亡くなってからは、摩訶迦葉の地位はいやおうもなく高まった。釈尊が摩訶迦葉を信頼していたことがもっとも大きかったであろうが、また摩訶迦葉が釈尊よりも年齢が高く、しかも厳しい修行者であるということもあったであろう。頭陀行は一般の比丘にはなじみのないものになっていたが、インドの伝統的な宗教的環境ではそれは賞賛されるべきもので、その実践者は「辟支仏」として「仏」につぐものという認識があったのである。摩訶迦葉は釈尊が比丘たちに自分の代わりに法を説いてくれと頼まれたとき、これを拒否できるだけの存在感を有していたが、摩訶迦葉は辟支仏的な存在であったから、これをよしとしなかったのかも知れない。そしてついに釈尊が入滅される時点では、摩訶迦葉はその法を嗣ぐべき人物となっていた。

[6] 釈尊は満80歳の誕生日を、ヴェーサーリーの近郊の竹林村で雨安居に入ろうとするときに迎えられたが、その時大病を患われた。いったんは持ちこたえられたものの、その衰えは誰の目にも明らかであった。これが雨安居を終えて次の目的地であるクシナーラーに向かうとき3ヶ月後に入滅すると宣言されたというエピソードになった。阿難は釈尊の意のあるところを汲んで、その時王舎城にいた摩訶迦葉に至急クシナーラーに赴かれるようにというメッセージを送った。

知らせを受けた摩訶迦葉はクシナーラーに急いだが、摩訶迦葉はそのときすでに93歳くらいとなっていた。そのうえ王舎城からの道のりは、ヴェーサーリーからの道のりの倍ほどもあり、そこでついに釈尊の入滅には間にあわなかった。釈尊がどうされているか気掛かりで、パーヴァーからクシナーラーへ行く途中に会った修行者に釈尊のことを尋ねて、その時すでに釈尊が亡くなられてから7日たっていることを知ったのである。

一方クシナーラーでは阿難や阿那律たちが摩訶迦葉がいつ来るかいつ来るかと待ちこがれていた。葬儀そのものは釈尊の遺言によって在家信者が執り行うとしても、せつかく呼び寄せた遺弟代表ともいふべき摩訶迦葉が来ないと葬儀は始められなかったのである。

こうして葬儀は釈尊の入滅後7日目にやっと執り行われたが、こうした流れの中で摩訶迦葉が釈尊の残された法の結集を主催することになった。葬儀に集まった主立った弟子たちが羯磨を行って決定したのである。釈尊が亡くなったのは2月15日(ヴェーサーカ月の満月の日)で、結集はその年の雨安居に住して行われたから、その準備期間は1ヶ月半くらいしかなかった。それが王舎城で行われたのは、大勢の比丘が3ヶ月もの雨安居を、しかも突然に過ごすためには大都市でなければならなかったし、また安定した後援者が必要で、王舎城

は主催者の摩訶迦葉の主な活動地であって彼の地縁血縁者が多く、その条件に合致したからである。

[7] 摩訶迦葉は以上のように他の比丘たちとはかなり毛色の違った経歴を持っており、また頭陀行という修行方法をもっぱらとしていたから、一般の比丘たちの大衆的支持を受けるような人物ではなかった。したがって釈尊の葬儀と第一結集を取り仕切った後でさえも、一般的な比丘、特に比丘尼の目にはうさんくさい人物と映っていた。だからこの時点になってもなお、摩訶迦葉は自分と釈尊の関係や、弟子になった時の様子、あるいは釈尊と衣を交換したこと、釈尊から嗣子・法の相続者などと印可されたことを弁明しなければならなかった。

ともかくこうして摩訶迦葉は釈尊が入滅された後も数年間は生きていた。一説に彼の寿命は120歳とされるが、それは単なる説話に属するであろう。原始仏教聖典では、長命は大概の場合は120歳で表わされるからである⁽¹⁾。しかし100歳くらいまでは生きてかも知れない。

一方では彼は弥勒仏が世に現れるまで入定して、釈尊の法を伝えるという伝説が生じた。これは彼が結集を主宰して、法の相続者となったという所に淵源を有するものであろう。

- (1) 「モノグラフ」第6号に掲載した【資料集1-2】「原始仏教聖典に見られる年齢記事一覧 [II]」 pp.163~166 参照

以上

註記 本稿作成における分担は主としてであるが、本澤が原始仏教聖典・後期の原始仏教聖典・アピダルマ・仏伝経典・大乘経論・中国撰述文献から摩訶迦葉に関する資料を収集し、森がそれを整理・分析して、文章としたものである。